

クシヤン朝仏陀立像コインの真贋について

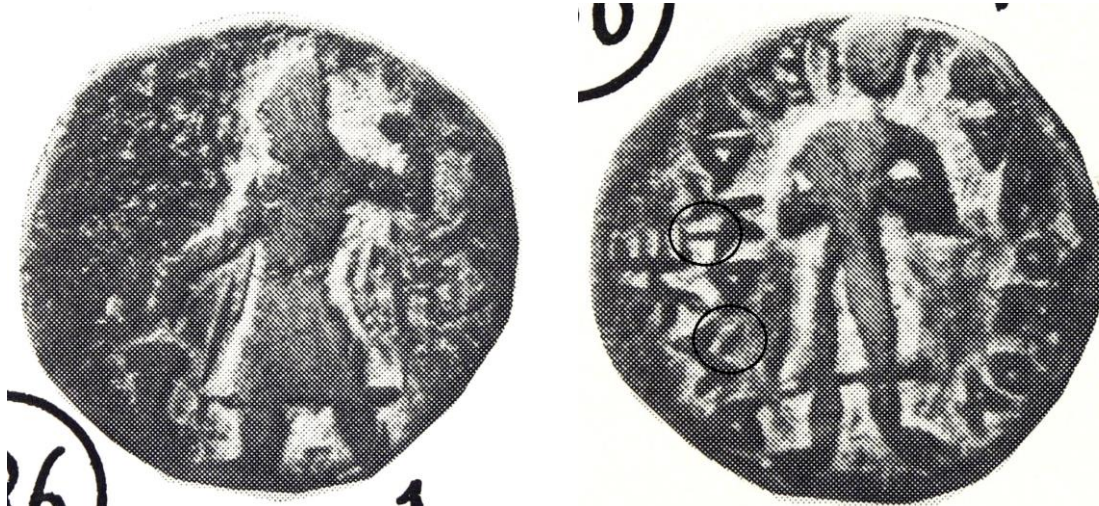
吉池孝一

—

ここに、クシヤン朝、カニシカ I 世が発行(紀元後 2 世紀中頃)したとされる仏陀立像のコインがある。材質は銅とおもわれる。円形の打刻コインで、重さは 17.0g、最大径は 26.6mm、厚さは 4.8mm となっている。



古代文字資料館所蔵



Göbl (1984) 掲載写真

オモテ面(写真左)は王の立像。向かって右側の銘文はコインの縁に沿って上から下に **𐎧** **𐎠𐎺** **𐎧𐎠** とあり、左側の銘文は下から上に **𐎠𐎺** **𐎧𐎠** **𐎧𐎠** とある。【**𐎠**】は摩滅のため見えない。銘文全体は、ギリシア文字バクトリア語で **𐎧𐎠𐎺** (shao 王) **𐎧𐎠𐎺𐎧𐎠** **𐎧𐎠**

(kanēshki カニシカの)とある。ウラ面(写真右)は仏陀立像。向かって左端にカニシカの紋章があり、紋章と立像の間に銘文がある。その銘文には上から下に **𐎧𐎠𐎺𐎧𐎠** **𐎠𐎺** **𐎧𐎠** **𐎧𐎠** **𐎧𐎠** **𐎧𐎠** とある。向かって右側の銘文は下から上に **𐎠𐎺** **𐎧𐎠** **𐎧𐎠** **𐎧𐎠** **𐎧𐎠** とある。【**𐎧𐎠**】の部分は欠けて見えない。銘文全体は、**𐎧𐎠𐎺𐎧𐎠** **𐎠𐎺** **𐎧𐎠** **𐎧𐎠** **𐎧𐎠** **𐎧𐎠** (sakamano シャカムニ) **𐎧𐎠** **𐎧𐎠** **𐎧𐎠** **𐎧𐎠** (boudo ブッダ) とある。ギリシア文字の  $\Sigma$  (s) は C と記される。文字 **𐎧** (sh) はバクトリア語の舌葉音に類する摩擦音を表記するために新たに考案された文字であり伝統的なギリシア文字のリストにはない。以上は Cribb, J. (1980) を参照した記述、本コインの銘文欠落部分 **𐎧𐎠** の補足も同論文中の銘文によった。

## 二

さて、ウラ面(写真右)、向かって左側銘文の **𐎧𐎠𐎺𐎧𐎠** の、**𐎧** の下に短い縦線「|」があり、**𐎠** の上には点「**・**」のようなものがある(丸印を付した。掲載写真参考)。ギリシア文字にとって、これは不要な記号である。さりとて、銘文以外の文様の反映とも思われない。これより、金型の作成時もしくは金型で打刻をする際に生じた意図しない瑕と考へざるを得ない。同様の記号のような瑕は、Göbl (1984) に掲載された複数のコインの内の一つにもある(丸印を付した。掲載写真参考)。本コインおよび Göbl (1984) に掲載されたコインの両者の同一部分に不必要な瑕があるということになる訳であるが、このようなことは偶然には起こらない。これが起こる理由として次に3点を挙げてみた。

- ①カニシカ I 世の当時、瑕が生じる同一の金型により、複数のコインが打ち出され、その後、別々に伝わり今に至った。
- ②近代以降、瑕が生じる金型が作られ、それによって打ち出された複数のコインに、人工的にそれぞれ異なる古色が施され流布した。
- ③Göbl (1984) の写真もしくは実物に基づいて記号のような瑕が生じる金型が作られ、それによって打ち出された複数のコインに、人工的にそれぞれ異なる古色が施され流布した。

## 三

上記の三つの可能性のうち、①の可能性は皆無ではないが、長い年月の経過を考慮するならば、極めて低いと言わざるを得ず、②もしくは③による贋作と見なして、大過はないであろう。②の場合、Göbl (1984) に掲載されたコインも贋作ということになる。③の場合はどうであろうか。Göbl (1984) 中の当該コインは、他のものと同く文様や銘文の状態が特に良いというわけではない。それにもかかわらず贋作の見本として選ばれたことになる。そのあたりの事情が明らかになればよいのであるが難しいであろう。いずれにしても、③の場合も②と同様に、複数の贋作が流通しているはずであるから注意が必要となる。もっとも、この種の贋作の場合、**𐎧** の下の短い縦線「|」と **𐎠** の上の点「**・**」の有無により

真贋を判断するという非侵襲的な簡便な方法で見分けることができる。

#### 参考文献

Cribb, J. (1980) Kaniška's Buddha Coins—The Official Iconography of Śākyamuni & Maitreya. *The Journal of the International Association of Buddhist Studies* 1980 (3. 2) : 79-88.

Göbl, R. (1984) *System und Chronologie der Münzprägung des Kušanreiches*. Wien, 1984.